

【解説】

ドイツトウルネンのアメリカ合衆国への伝播と普及をめぐる
アネッテ・ホフマンの研究有賀 郁敏ⁱ

MLB ロサンジェルス・エンゼルス (LAA) の大谷翔平の活躍がメディアを通じて連日紹介されているように、アメリカ合衆国ではベースボール、アメリカンフットボール (NFL)、バスケットボール (NBA) などのプロスポーツがメディア戦略を通じ人気を博し、多くの収益を得ている。それに対し体操競技は、オリンピックで多くのメダルを獲得しているにもかかわらず注目されることはあまりない。ちなみに、オリンピックの女子体操競技において、アメリカはアトランタ (1996年)、ロンドン (2012年)、リオデジャネイロ (2016年) の団体戦、また個人総合でレットン (ロサンジェルス:1984年)、パターソン (アテネ:2004年)、リューキン (北京:2008年)、ダグラス (ロンドン)、バイルズ (リオデジャネイロ)、リー (東京:2021年) が、それぞれ金メダルを獲得している。文字通り体操王国である。体操はアメリカにおいて外来文化なのだが、その際、ドイツからの移民 (移住者) が重要な役割を果たしたことはあまり知られていない。その意味でホフマン論文 (以下、論文) には、こうした歴史的空白を補う点でも重要な学問的意義がある。

論文の概要に入る前に、アネッテ・ホフマン教授の経歴について簡単に触れておこう。

ホフマン教授は、現在ドイツ・ルートヴィクスブルク教育大学で教員養成課程の教育と研究に携わっている。氏の専門はドイツスポーツ史、アメリカスポーツ史、スポーツ教育学、スポーツとジェンダーなどであり、自身も実践しているアウトドアスポーツに関する造詣も深い。ホフマン教授はテュービンゲン大学研究助手時代、同大学スポーツ科学インスティテュートのオモー・グルーベ主任教授、同大学私講師ミヒャエル・クリューガー (現ミュンスター大学スポーツ科学インスティテュート教授) 氏と学問的関係を築き、教授資格論文執筆後、上記大学の教授職に就任している¹⁾。

ホフマン教授は大学の教育と研究に携わる傍ら、国際体育・スポーツ科学学会 (ICSSPE) 副会長、国際体育・スポーツ史学会 (ISHPES) 会長 (2021年まで)、ドイツトウルネン連盟 (DTB) 副会長、ドイツオリンピックアカデミー (DOA) 委員、バーデン・ヴュルテンベルク州スポーツ史学会 (IfSG) 副会長など、国内外のスポーツ関連学会、団体の重責を担っている。こうした職責とも関連し、氏は度々来日しており、直近では ISHPES Congress (北海道大学; 2020年8月)、日独スポーツ科学会議 (日本体育大学; 2023年3月) に、それぞれ学会長、学術コメンテーターとして招聘されている。

さて、ホフマン教授は論文でアメリカ合衆国へのトウルネン (Turnen) の伝播と普及の歴史を概括的に論じている。同国へのトウルネンの伝播と普及をめぐることは、論文でも引用されているユーパーホルストの著作が先行研究として注目されてきた²⁾。この著作において、ユーパーホルストはフリードリヒ・ヘッカーなどの

i 立命館大学名誉教授

German Forty-Eighters（亡命した1848年革命家）を軸にシンシナティなどにおける彼らのトゥルネン普及活動を論じ、さらに南北戦争の際、北軍に加わり参戦したこれらトゥルナーの1848年革命と同根の政治課題（自由と統一）をフォーカスしている。論文でもこの点は触れられているが、ホフマン論文の白眉は、ユーバーホルストの著作よりも考察期間を長く設定し、それを3期に分け、加えて伝播と普及の際にしばしば生じる受容側（アメリカ）との軋轢や民族ナショナリズムの影響などを手がかりに、アメリカにおけるトゥルネン史像を複眼的に描こうとしていることである。こうした視点は論文の面目躍如といつてよいだろう。以下、それぞれの時期の特徴を素描しておこう。

第1期（1820年代）は、アメリカ人教育者や医師の提案によりアメリカ東海岸の学校・教育機関にトゥルネンの導入が試みられた時期である。ちなみに、この段階においてドイツからの移民はそれほど多くはない。

ドイツトゥルネン史において1820年代は重要な時期の一つである。トゥルネンの考案者にして後に「トゥルネンの父」と呼ばれるF.L. ヤーンのトゥルネンの広がり、1820年代に入るとナポレオン戦争時の勢いを失う。そのターニングポイントが「カールスバートの決議」（1819年9月）であったことは明らかである。当決議によってブルシェンシャフト運動はいうまでもなく、大学、出版に関する法律に基づいた捜査機関による検閲などが認められ、ドイツにおける初期のトゥルネンも禁止対象となり、ヤーンの弟子の一人であるカール・フェルカーは国外移住を余儀なくされた³⁾。

それゆえ、この時期にトゥルネンをアメリカに普及しようとする提案はヤーンらにとってもなほどこかメリツトがあったはずである。論文ではボストンのハーバード大学へのトゥルネン導入をめぐり、ヤーンが少なくとも2000ターラーの年俵をアメリカ側に要求していたこと、しかし自身はドイツから離れることを嫌い、弟子たちを送り込もうとしていたことが叙述されている。ヤーンが移民を「自殺」「魂の病」と形容しながら、K. ウオーレンなどの弟子を国外に送り込もうとしたことは、ヤーンのプラグマティックな行動を示している⁴⁾。この時期のトゥルネンの普及活動がアメリカ人医師・知識人を通じて教育機関における授業として構想されていた点—論文では「学問的」トゥルネン—は、明治期日本の体育重視政策との比較において興味深い、その解明は本解説の範囲を超える。いずれにせよ、この段階では市井の人びとへのトゥルネンの普及は対象外であった点を確認しておきたい。ついでに言えば、A. トクヴィルがアメリカに渡り、後に『アメリカのデモクラシー』を公刊したのは1830年、31年である。周知のごとく、トクヴィルはアメリカ社会のタウンシップに着目し、結社、中間団体を「民主主義の学校」として高く評価したが⁵⁾、第1期において、そうした結社活動の中にトゥルネンは溶け込んでいなかったのである。

第2期（1848年から1870年代まで）で注目されるのは、上述したGerman Forty-Eightersの活動である。この時期にトゥルナーを含む多くの人々がドイツからアメリカへ渡った。ヘッカーは1848年11月にシンシナティに最初のトゥルネン協会（Cincinnati Turngemeinde）を創設、その後約700のトゥルネン協会が合衆国で設立され、1890年代のピーク時には約4万人以上の会員が活動していたようだが、そのパイオニアは1848年革命で戦ったトゥルナーたちだった。革命後に約3000から4000人がアメリカへ移住し、これらの人々の多くはドイツの協会制度に通暁し、ドイツ語新聞・機関誌を発行し、ドイツ語学校を設立するなど、いわゆる教養市民層たるにふさわしい文化資本を活用することができた。論文ではこの点を「知的・文化的ルネッサンス」と表現している。

1850年から70年にかけて移住した人びとは、アメリカにドイツ人コミュニティ（リトル・ジャーマニー）をつくり、そこでの諸活動を通じてドイツ人としてのアイデンティティを醸成した。1850年創設の北米社会主義トゥルネン同盟という名称が物語っているように、移民したトゥルナーたちの中にはトゥルネン活動の中に

社会主義などの政治思想をビルトインする者も少なくなかった。論文ではこの点に関して、「トゥルネン同盟は革命的な思想の苗床になる」とし、奴隷制、肌の色、宗教、出生地、さらに性別の差異による個人的権利の剥奪をトゥルナーの国際的世界観に反するものとして批判したと書かれている。

1861年に開始される南北戦争へのトゥルナーの参加は、この点を象徴する出来事であろう。リンカーン大統領就任式（1861年3月）にボルチモアのトゥルナーが護衛隊として参加しているが、この光景はフランクフルト国民議会（ドイツ憲法制定国民議会：1848年5月）会場の聖パウロ教会前に議員の防衛のために参列したトゥルナー護衛連隊を想起させる。奴隷制反対を宣言して戦った「トゥルナー連隊」の活動は、アメリカ社会・国民に認知され、トゥルネン協会の「アメリカ化」を促す契機となった。

アメリカにおけるトゥルナーの政治参加は、南北戦争後も継続される。1870年代から80年代にかけて頻発する労働争議で示された労働条件改善要求、14歳までの義務教育実現要求、公園や公的な遊び場の建設に向けた運動などにトゥルネン協会も加わっている。また、平等の観点から女性のトゥルネン協会への参加が1868年に降に問題視されるようになる。女性の正会員問題は19世紀末から20世紀に入ってから本格化するが、この点も協会組織の政治性を物語る事例である。ちなみに同時期のドイツでは、トゥルネン協会の「政治的中立」宣言がなされるなど、統括組織であるドイツトゥルネン連盟（DT）の右傾化・官民一体化が進行するのであり⁶⁾、アメリカの状況とは異なっているようにみえる。

ところで、論文ではこの時期におけるヤーン像の転換も論じられており、興味深い。たとえば、ヘッカーはアメリカにおけるヤーンを祝う記念式典への参加を拒否した。その理由は、ヤーンが1848年革命に対しネガティブな態度をとったことにある。論文ではシカゴのトゥルネン協会関係者に宛てたヘッカーの2通の手紙が引用されているが、「血と殺人の匂いに包まれた悪党の誕生日を祝うことに手助けするつもりはない」「卑屈な国王の下僕であり臣下であった」とあるように、ヘッカーはヤーンを手厳しく断罪している。

これに対し、1890年代から20世紀に入るとヤーン崇拜と追憶の念が協会から押し出される。そこではドイツ系アメリカ人が祖国を離れた後にトゥルネンを介して交歓する意義が強調されている。このような心情を可視化しているのがセントルイスにおけるヤーン記念碑の建立である。記念碑は万博（1904年）会場のドイツ館跡地に建てられた。ヤーン像に付けられた剣、トーチ、フクロウなどは正義、闘争、知恵など、ドイツ系アメリカ人のトゥルネン運動のシンボルであった。

この時期に着目すべき事柄は、アメリカにおけるトゥルネン協会としての活動範囲がドイツの協会と同様に広いことである。演劇会などの娯楽イベント、討論会の開催、アメリカ人になるための英語、歴史、地理、数学などの教育が展開され、クラブ内には図書室やバブも併設され社交の場として機能した。このことは市民社会におけるクラブの社会形成機能を物語っている⁷⁾。

第3期（第1次世界大戦以降）では、ドイツ系アメリカ人の意識の変化が浮き彫りにされるとともに、第1次世界大戦のドイツ敵国化政策によるトゥルネン評価の反転が論じられている。

19、20世紀転換期になるとアメリカのトゥルネン同盟における政治性は急速に弱まった。移民二世の中にはドイツ語を話さ（せ）ない者もおり、これらの人々にとって、移民一世が重視したドイツの文化資本の活用も意味をなさなくなった。加えて、第1次世界大戦におけるアメリカの反ドイツ政策の進展によりドイツ的なものへの反感が高まった。ドイツ語教育の禁止、ドイツ語雑誌の出版停止、ドイツ人作曲家の追放、ドイツ劇場の閉鎖、街の通りのドイツ的名称の変更など、「ドイツ狩り」が様々な領域で進められたのである。トゥルネンがこの中に含まれたことは言うまでもない。アメリカ化の加速である。しかも、1920年代におけるアメリカの鎖国政策とも言うべき一連の移民立法の制定は、同国におけるトゥルネン評価をさらに悪化させた。ドイツ語

流の名称はアメリカ風となり、たとえば“Amerikanischer Turnerbund”は“American turners”に、“Amerikanische Turnzeitung”は“American turner topics”に改名されている。

興味深い点は、こうした傾向にあってもヤーンへの評価が悪化しなかったことである。たとえば、“Turners weekly”（1927年）の表紙には「よりよい世界のための自由教育」という副題が付されて、そこにヤーンとリンカーンが並んでいる。フィヒテと同様、『ドイツ民族性』の中でナショナリズムに通じる提言を行ったヤーンが「ドイツ狩り」の中で生き残るところが高評価を得た理由はどこにあるのだろうか。論文ではヤーンのトゥルネンがアメリカの青年教育に貢献している点が描かれている。American Boy Turnersは10歳から18歳の少年たちを体操運動へ誘い、アメリカの歴史と価値観を教育することを目的に設立されている（1933年）。その憲章にはクラブへの愛着と忠誠心を促し、「スポーツマン」「良き市民」の育成が謳われている。応援歌には「ヤーン！ヤーン！・・・」という歌詞がある。このような状況を踏まえれば、民族アンディティの涵養やドイツの青少年教育の手段でもあったヤーンのトゥルネンが、ドイツ的性格を脱色したアメリカ社会における秩序形成機能を有し、20世紀前半のアメリカにおける社会政策の手段となっていた点を読み取ることができるだろう。このような兆候はナチズムそして東ドイツの権威国家でヤーンが評価された事実とともに、文化交流の過程でしばしば垣間見られる「変種の増大」というスポーツ伝播の世界史的動向を俯瞰すれば驚くことではない⁸⁾。

ちなみに、論文では触れられていない点だが、アメリカも参加したベルリンオリンピック（1936年8月）を前に、ナチスのユダヤ人迫害などに対する批判を反映し、アメリカでは大会参加ボイコット運動がスポーツクラブを巻き込んで展開されている。第2次世界大戦へと向かうプロセスにおいて、アメリカの体操（この場合、Turnenではなくgymnastics）関連団体のナチスドイツ評価はどうだったのだろうか⁹⁾。また、第2次大戦後のアメリカ社会におけるトゥルネンあるいはヤーンに対する評価は論文では欠落している。この点に関してはホフマン教授の他の著作や論文にあたらなくてはならないだろう¹⁰⁾。

ホフマン教授とはテュービンゲン大学客員研究員（1998年-1999年）の時に知り合い、その後も親交を深めて現在に至っている。ちなみに、私は彼女のことをホフマン教授あるいはホフマンさんと言ったことは一度もなく、もっぱら「アネッテ」と呼び、彼女も私のことを“iku”としか言わない。この3月、彼女が京都を訪れた際、大阪の新世界を一緒に回り、大阪名物串カツを食べ、道頓堀ではかの有名な広告看板の前で同じ格好の写真を撮った。彼女の言動から国際学会・団体の重鎮という印象はまったく感じられず、私にとってはドイツにいる（彼女からすれば日本にいる）家族のような存在である。ちなみに、アネッテさんは納豆はじめ日本食を好むがチーズは食べない。好き嫌いの事柄とはいえ、ドイツの食習慣のイメージからすると不思議である。学会誌の解説文にこのような学問とは「離れた」こまごまとした事を書くのもどうかとは思う。しかし、様々な社交を大切にしてきたトゥルネン協会に思いをはせながら、協会やクラブの歴史を探究してきた者同士の精神の燃焼ともいうべき実態を語るのも、あながち無意味ではなからう。

昨年（2022年）夏頃、私はアネッテさんに産社論集の退職記念号への寄稿を依頼し了解を得た。私の依頼の仕方が良くなかったのだが、母国語（ドイツ語）に勝るとも劣らぬレベルの英語論文を書く彼女は、ドイツ語の論文を送付してきた。おそらくドイツ史研究に携わる私への敬意と配慮もあるだろう。とはいえ、読者にとって独語への馴染みがそれほど深くないと考え、このようなやや長めの解説文を書くことにした。

最後に、この度の私の退職を記念した本誌に論文を寄稿してくださったホフマン教授（アネッテさん）に対し、ここに記して心より感謝申し上げたい。

注

- 1) A. Hofmann, *Aufstieg und Niedergang des deutschen Turnens in den USA*, Schorndorf 2001. ホフマン教授の経歴に関しては、以下の URL を参照。https://www.ph-ludwigsburg.de/fakultaet-2/institut-fuer-kunst-musik-und-sport/sport/forschung-lehre/ personen/annette-r-hof（最終閲覧日：2023年4月19日）
- 2) H. Ueberhorst, *Turner unterm Sterner Banner*, München 1978.
- 3) プロイセンでは1820年から1842年までヤーンのなトゥルネンは禁止された。歴史上、“Turnsperre”と言われた時期である。もっとも、トゥルネン全体が禁止されわけではなく、学校で体操（Gymnastik）を実施していた都市はあった。有賀郁敏「19世紀前半のチュービンゲンにおけるトゥルネンとトゥルナー組織の規則」『体育・スポーツ史研究への問いかけ』清水重勇先生退官記念論集刊行会，2001年6月，61-69頁。有賀郁敏「ドイツ初期トゥルネン協会運動における結社の自由をめぐる問題—結社，法制度，社会的自己調整メカニズム—」大熊廣明他編『体育・スポーツの近現代—歴史からの問いかけ—』不昧堂出版，2011年，501-521頁。
- 4) ヤーンのプラグマティックで実益的な行動は1810年代におけるプロイセン行政との交渉にも示されている。氏はここでも弟子たちの教育機関や官吏職への就職を行政に要請していた。この点に関しては，C. アイゼンベルク（市井吉興・有賀郁敏訳）「フリードリヒ・ルートヴィヒ・ヤーン—トゥルネンの『考案者』—」『立命館産業社会論集』第37巻第1号，2001年，151-167頁，ならびに有賀郁敏「フリードリヒ・ルートヴィヒ・ヤーン—トゥルネンの『考案者』の翻訳にあたって—」同147-150頁を参照。
- 5) シュテファン・ルートヴィヒ・ホフマン『市民結社と民主主義 1750-1914』（山本秀行訳）岩波書店，2009年参照。
- 6) この点に関しては，有賀郁敏編『スポーツの近現代—その診断と批判—』ナカニシヤ出版，2023年参照。
- 7) 有賀郁敏「西南ドイツにおけるトゥルネン協会運動—1840年代のシュヴァーベンを中心に—」有賀郁敏他著『近代ヨーロッパの探究8 スポーツ』ミネルヴァ書房，2002年，145-197頁。もっとも，ここに記した市民社会はあくまでも同時代のアメリカ社会の性格を踏まえたものであり，没価値的ましてや批判免疫的存在ではない。
- 8) 有賀郁敏「市民的結社としてのトゥルネン協会とスポーツクラブ」坂上康博他編『スポーツの世界史』一色出版，2018年，119-147頁。ちなみに，柔道はJUDOであり，国内的視点（期待感）から「日本のお家芸」と自認することは自由だが，ルールの変遷過程をみただけでもグローバル化の趨勢は明らかである。
- 9) ボイコット運動に関しては，さしあたり青沼裕之『ベルリン・オリンピック反対運動—フィリップ・ノエルベーカーの闘いをたどる—』青弓社，2020年参照。
- 10) A. Hofmann, ebed., 2001. Ders. (Hrsg.), *Sport in den USA*, Münster 2012.

